

広尾学園中学校高等学校 (前 順心女子学園)

帰国生には最高の環境と条件 (11)

国際担当 小山 和智

2007年4月、新生「広尾学園」がスタートしました。順心女子学園の帰国生に対する受け入れ体制や個別指導の素晴らしさが、既に合格した多くの男子にも開放されることになりました。ますます目が離せない学校です。

● 国際生入試はカジュアル？

帰国生や外国籍生徒の入学選抜は、各受け入れ校によってさまざまな形がとられていますが、そこには各校が欲しい生徒像が現れています。しかし、海外で教育を受けてきた生徒の受け入れに特別の配慮をする学校においては、書類審査と「作文／小論文」と「面接」で選考するのが一般的となった現在でも、未だに「日本語による学科試験」に拘っている学校も少なくありません。

日本語の学科試験を課さないということは、ともすると「入試が簡単」「レベルが低い学校」といった誤解や中傷を受けやすいという事情もあります。そうしたリスクを負いながらも、あえて海外育ちの生徒を積極的に受け入れ育てている学校群について、海外在住の皆様には是非、正しくご理解いただきたいところです。

広尾学園が欲しい生徒は、このコーナーでも繰り返し説明していますように、次の3点を備えた生徒です。(1) 多角的な視点を持ったり許容したりできる、(2) 論理的に段階を追って考えを進めることができる、(3) 自分が感じたり考えたりしていることを、相手に分かり易く的確に説明できる。

これらは、世界各国が共通に持つ“本当の学力”観ですし、今年4月から導入した「IBプログラム」の根底にある基本理念でもあります。つまり、世界中どこに行っても、どんな相手とも一緒にチームを組んで仕事ができ、成果を出せる力を伸ばそうという祈りにも似た理想です。

したがって、過去3年間の通知表等を読む際も、小論文を採点する時も、面接を行う時も、この3つの観点から評価

がなされています。一人ひとりの受験生が、これまでどういう努力をして現在があり、どういった潜在力を秘めているかを、学園の命運を賭けて見極めようとしているのです。決して「カジュアル」であるわけがありません。

● 小論文に過去問？

国際生入試の問い合わせで「小論文の過去問はありませんか？」という質問が結構あります。作文でしたらテーマがあるでしょうし、小論文といっても「傾向と対策」が必要だという考え方は当然です。しかし、広尾学園の「小論文」には、いわゆる「過去問」といえるようなものはありません。では、何で準備すればよいかといいますと、現地校で嫌というほど訓練される「5段落エッセイ」です。

現地校の教室には、よくハンバーガーの絵が壁に貼ってあるようです。「最初に結論、次に理由が3つ、最後にまた結論」というエッセイの形式を現しています。日本人学校の生徒には少し苦手かもしれませんが、よくいわれる「起・承・転・結」の“起”を省いて、“転”を“3つの理由”にすると考えればよいわけです。

実際の入試は、自分の学年の国語の教科書に載っているような文章を2ページ分くらい読んで、それについて自分の意見を書くという形式です。出題の文章も問いも日本語で読みますが、書くときは日本語・英語どちらで書いてもかまいません。しかし、字数が400～500字（英語なら400～500語）と制限されることに注意してください。通常なら700字／語前後になる内容を、ほぼ半分の分量に圧縮してコンパクトにまとめる必要があります（試験40分）。

日頃のエッセイ訓練が将来、会議の時の発言やプレゼンテーション、企画書・起案書などの上書き等で生きてくるのですから、小・中学校の段階からやっておくに越したことはありません。広尾学園の「小論文」でも、そして「面接」でも、日頃からやってきた訓練の成果が試されるわけです。



ブラスパンドの練習風景